

民進党 広報課 御中

2017年5月8日
ウェイン・ダグラス
ベンゾ・ケース・ジャパン 主宰者
ベンゾ注意喚起の日 共同創立者

薬害による社会問題について、ご協力をお願い
(亡き大橋巨泉からの提案)

はじめまして

私は元民進党所属代議士で今は亡き大橋巨泉氏の友人のウェイン・ダグラスと申します。私はニュージーランド出身ですが、大橋巨泉氏がニュージーランドで経営していた『OKギフトショップ』で仕事をさせて頂いていた時に、初めて本人にお逢いました。

ご存知のとおり、巨泉氏は去年7月に亡くなりました。その前、私は彼とのメールの遣り取りを最後まで続け、その内容は主に巨泉氏の健康状態、ニュージーランドに行きたいという本人の願望、そして今の私の活動などについてでした。

とある日、私の活動について「民進党の広報課に連絡してください」と巨泉氏に言われました。その目的は、今の日本社会に深刻な影響を及ぼしている薬害の注意喚起をすることです。とりわけ処方薬で精神安定剤・睡眠薬（例：マイスリー、ハルシオン、セルシン、ソラナックス、デパス、コントロール、ワイパックス、リボトリールなど）に用いられているベンゾジアゼピン系薬剤という薬剤です。

今年の7月11日は第2回「世界ベンゾ注意喚起の日」になりますが、実は私がこの日の創立者です。去年の予備イベントとして、東京都議会議員の上田令子氏をはじめ、新宿の議員、練馬区の議員と一緒に新宿駅前でチラシ作戦に参加し、演説にも努めて参りました。また当日は企画者の小谷武史氏と一緒に厚生労働省に陳情訪問をし、全国から集まってくれました約30名の被害者もベンゾジアゼピン系薬剤による過剰処方およびその害を訴えました。

つきましては、もし民進党がこの社会問題の注意喚起活動、特に今回の第2回「世界ベンゾ注意喚起の日」に力になって頂ければと思い、このお手紙をお送りさせて頂きました。少しでも関心を持って頂けると幸いです。

記

私の主な活動

● 2003年2月～2011年10月：

ベンゾジアゼピン処方によって、私だけではなく多くの人々が、いかに苦しめられているのかを理解してもらうために、およそ10年間（準備時間を含む）をかけて日本で裁判

を起こし、最高裁判所まで日本語で闘いました。私と弁護士は「ベンゾジアゼピン系薬剤の危険性について世間にもっと注意を喚起し、日本でより安全なベンゾジアゼピン処方ガイドラインが設置されるよう働き掛けるため」に、本気で判例をつくってやろうと、この裁判を闘いました。

● 2012年8月：

読売新聞によるアシュトン教授への取材（Q&A）をコーディネート。取材は日本国内におけるベンゾジアゼピンが引き起こす諸問題についての注意喚起をするために行われました。

● 2012年中頃：

アシュトンマニュアル日本語版の翻訳に協力し、そのマニュアルは2012年8月19日に一般公開しました。

● 2013年1月：

高齢者のマニュアルへのアクセスがより容易になるために、アシュトンマニュアル日本語版の印刷出版の許可を交渉しました。

● 2013年3月：

日本人医師とアシュトン教授との間の情報交換サポート。本件は、他の医師に処方されたベンゾジアゼピン過剰投与により意識障害を起こした患者への対処方法を詳細確認するため。

● 2014年3月：

少しでも皆様の一助となればとの思いからベンゾ・ケース・ジャパン (Benzo Case Japan) というサイトを作りました。当サイトの目的はベンゾジアゼピンに関する情報、また私の経験も併せて広くこの薬剤の危険性を世に知らしめるために立ち上げました。

● 2014年10月：

第16回国際嗜癮医学会 (International Society of Addiction Medicine, ISAM) 年次総会がパシフィコ横浜会議センターにおいてベンゾジアゼピン系薬剤および類似薬剤の“不適切な処方”による危険性について注意喚起をするため、パネラーとして発表をしました。

● 2015年04月：

薬害オンブズパースン会議において、ベンゾジアゼピン系薬物に関する要望書の意見交換に参加しました。同要望書は2015年10月28日に関係各企業、厚生労働省、文部科学省、関連学会に提出されました。

● 2015年～2016年：

世界ベンゾ注意喚起の日の設立（上のビデオ参照）。

私と大橋巨泉氏との間で交わされた送受信文の一例

FAX (頁数：2)

2014年11月13日

OK Agency
大橋 巨泉 様

Wayne Douglas
〒390-1243 長野県松本市神林 5689-2
神林宿舎 2 棟 103 号室
wayneinjapan@gmail.com
TEL：090-8177-0909

週刊現代のコラムなどについて

Dear Ohashi Kyosen,

お久しぶりです。私のことをお忘れかもしれませんが、私はおよそ20年前、OKギフトショップ（オークランド店）で仕事をさせて頂いたウェイン・ダグラスと申します。その当時、St Heliers Bay のレストランで忘年会をご一緒にお祝いさせて頂きました。私は一所懸命に日本語で挨拶をし、そして大橋巨泉様は「ウェインはまだ日本に行ったことはないのにそれだけの挨拶をして素晴らしいです」と褒めて頂いたことを今も忘れておりません。

実は、その後の私はついに来日をし、17年間を日本で過ごして参りました。しかし、途中で、今の日本の大きな社会問題に私自身が直面してしまいました。それは処方薬依存症です。あまり辛い経験でしたので、今の私はボランティアとして、この処方薬依存症の注意喚起に取り組んでおります。また、私は東日本大震災の時、福島に住んでいて、今は避難生活を送りながら上記の活動を続けております。

この処方薬についてもっと具体的に言いますと、睡眠薬（導入剤や入眠剤を含む）や抗不安剤また鎮痛剤としてよく処方されているベンゾジアゼピン系薬剤です。商品名は数百もありますが、「マイスリー、ハルシオン、セルシン、ソラナックス、デパス、コントロール、ワイパックス、リボトリール」などがよく知られています。実は、日本の処方件数は世界で最も多いのです。

日本の多くの医師はこの薬の中毒性や離脱症状の激しさおよび持続期間についての知識を有せず、むしろ、この薬を沢山の人のために長期に亘って処方して、その薬害を増やし続けているのが現状です。その結果、多くの人たちが独りでもがき苦しんでいます。子供や高齢者への処方も増える一方です。

そこで、私は世界第一人者（英国のアシュトン教授）と日本の専門医（別府宏邦先生）と手を組んで、アシュトンマニュアルの翻訳（ベンゾジアゼピン系薬剤と離脱法について

の解説書)に協力し、今はそのマニュアルは日本医療従事者に注目を集めつつあります。しかし、問題はこの理論を理解せず、「そんなものは見るな」「そういうのは困るのだよ」と患者をしっかりとつける医者もいるということです。

マニュアルで指摘されているように、社会コストの中では虐待(今、日本で問題となっている)、暴力(家庭内外)、妊婦や新生児への有害作用、自殺、失業、交通事故、高齢者では転倒や骨折の原因、違法薬物乱用の入口となり得ることなどが含まれています。また、最新研究の文献(2014年)によると、不可逆的あるいは永続的障害としては、認知機能障害やアルツハイマー病を出現するリスクは増加するという結果が出ています。

今年3月に、私はこの薬についてのウェブサイト(Benzo Case Japan)を立ち上げ、上記のマニュアルも公開し、毎月およそ3万人(大部分は日本人)の利用者がアクセスしています。国内外の名誉教授からの高い評価も得ておりますが、苦しんでいる人たちは後を絶たず、私のところには日本全国からSOSのメッセージが寄せられています。また、今住んでいる松本市でも地元の高齢者の断薬にも協力をし、今その人たちは元気を取り戻しています。

さらに注意喚起をしたいと思って、今年10月に、パシフィコ横浜会議センターで開催された「第16回国際嗜癮医学会の年次総会」での講演を申請し、その結果、世界舞台で日本の状況(諸外国のような適切なガイドラインや離脱治療施設もないこと等)をアピールすることができました。また、来年の1月ごろ、英国議会下院でこの薬が引き起こす社会問題についての国際調査にも参加する予定です。

つきましては、このように注意喚起に取り組んでいるのですが、私一人の力だけではなかなか難しいです。大橋巨泉様は現在、週刊現代のコラムで様々な社会問題について執筆していらっしゃると思いますが、この処方薬依存症という日本の非常に深刻な社会問題について、誌面で取り上げて頂く訳にはいきませんかでしょうか。お時間をお作りになって頂ければ、一度相談をさせて頂きたいと思えます。

なお、この件へのご協力が困難である場合、ご協力を頂けそうな方をご紹介して頂ければ幸いに存じます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

Yours Sincerely,

Wayne Douglas

追伸：20年前のOKギフトショップに務めて以来、今の店長のダラン・ブラウンさんとずっと友だちになっており、今年2月ごろ、ニュージーランドに帰った時に、一緒にお茶をしました。彼は私の日本での活動について、少しは理解してくれていると思えます。